

対 談

森の生活から時代を見つめて

Best regards!
Cronical

C.W.ニコル

1940年英国ウェールズ生まれ。作家。カナダ、アフリカなどを経て現在長野県信濃町黒姫山麓に在住。小説『ティキンイ』（角川書店刊）など多数の著作がある。



狩野 誠

大正14年東京生まれ。㈱黒姫和漢薬研究所社長。敗戦後の昭和21年黒姫山麓に入植、翌年同社を創業し現在に至る。



森の生活から 時代を見つめて

〔黒姫入植〕

もらった高下駄をリュックにさげて、
ここに入ってきたんです——

ニコル 狩野さんが黒姫山で暮らすようになってどのくらいになりますか？

狩野 昭和21年に来ましたから、もう40年近くなりますね。

ニコル それじゃ戦争が終ってから。東京から来られたんですね。

狩野 そうなんです。当時、東京は敗戦後の荒廃した状態で、一面の焼野原でした。政府としてもできるだけ東京から放っばり出そうという方針だった。東京都庁には北海道から九州まで、全国各地の開拓入植地の地名が貼り出してあって私も探しに行ったんです。

ニコル じゃあ、その中に黒姫の名前もあったんですね。

狩野 その通りなんです。「黒姫山」という何か神秘的でロマンチックな名前にすっかり惚れこましてね。それだけで決心したんですから、今思えば……。 (笑) どんな所かもよく知らなかったんですからね。

ニコル 何かアドバイスしてくれる人はいませんでしたか？

狩野 それが面白いんです。私の先輩にこう言う人がいましてね、「黒姫はものすごく雪が降るそうだから高下駄を持っていけ」と。(笑)

「これをあげる。これを持っていけばどんなに雪が降っても大丈夫だ」と。(笑) で、もらった高下駄をリュックサックにぶらさげて、黒姫に入ってきたんです。

ニコル 高下駄とはね。(笑) ほんとに使いましたか。

狩野 それがですね、私が入植したのが昭和21年の9月なんです。山は紅葉して、それはきれいでした。私はずっと山の上の方に住みついたものですから、そこから見ると野尻湖が箱庭のように見える。それから、今はスモッグで見えませんが、新潟の柏崎から直江津にかけての日本海がずっと見わたせたものです。これはいい所に來た、としみじみ思いましたよ。

黒姫和漢薬研究所

ニコル ほんとに、ここのいちばん良い季節ですよ。

狩野 それがどうでしょう。11月末あたりから雪ですよ。ひと晩に1mですからね、高下駄なんかじゃ間に合わないわけです。それを私は馬鹿正直に、2m3mの雪の中を高下駄を履いて山を下って行ったんです。

ニコル みんなびっくりしたでしょう？

狩野 ええ。その頃私はヒゲを生やしていましたし、髪の毛を長く伸ばして、散髪に行きました。それで高下駄をはくんですから、村の人たちが驚きましたよ。「天狗が来た！天狗が来たぞ！」と。(笑)

ニコル (笑) 目に浮かぶようですね。

狩野 ニコルさんが黒姫に来られてからどのくらいですか。

ニコル 初めて来たのは1978年で、ここに住むようになったのが80年です。同じ黒姫にいる詩人の谷川雁さんに勧められたのです。

狩野 ニコルさんは世界中いろんな所に行かれたそうですね。それがまたなんで？

ニコル 狩野さんと同じですよ。北極、カナダ、エチオピア、それに日本の中でも東京、和歌山など冒険と動物を求めているいろんな所に行きました。それが黒姫に来て山を見て、黒姫の姫に恋をしたんです。黒姫と暮らしたら僕の運が良くなるなと思いました。

狩野 東洋の言葉に「一期一会」というのがあります。ニコルさんとは空手道修行の同門なのですが、それが奥信濃の黒姫山麓でお会いするとは…。何か不思議な縁なのでしょうね。

ニコル そうですね。何か神がかり的なことを言うようですが、そうとしか説明できませんね。黒姫に住んでから僕は、人生の総てではないけれども、大部分に納得できるようになった…。やっぱり僕はこういう生活をするべきだったのだ、と。もう、日本を離れるつもりはないです。仕事や旅行で外国へは行くけれど、必ずここに帰ってくる…。



〔宮沢賢治、そして桃太郎学校〕

賢治の「デクノボウ」を

ひとつの目標にしたわけなんです——

狩野 ところで、今ニコルさんは宮沢賢治の翻訳をなさっているとか。私も興味あるところなのですが、賢治のどこに一番ひかれますか。

ニコル 彼の自然をみる眼ですね。僕の下手な日本語ではうまく説明できないんですけど、「何か不思議な童話だな」と思って読むと、実に深く自然のことをわかっているんですね。

狩野 宮沢賢治は、土をなめては土の言葉を感じ、風をみては『風の又三郎』のような童話を書き、どんぐりや草をみては『どんぐりと山猫』を書くというように、自然と対話ができるんですね。

ニコル 彼の体は小さくて強くなかった。だから早く死んだんでしょう。しかし、彼の心は、その小さな胸から飛ぶことができた。そこが好きです。それに「私は神だ」とか「私はあなた方より物知りだ」とか言わなかった。相当な人物じゃないかな、あの人は。

狩野 私と宮沢賢治との出会いをお話しましょう。私がここへ来た頃は、今のように道が整備されていないものですから、雪が降ると開拓の子供たちは学校へ行けないんです。それで私の家に何とはなしに集まってくるわけですよ。黒姫の子供たちは雪が降ると学校を休んでもいいのかなあ、と思っていたんですけど、当然長期欠席になるんですね。それで最後には二十何名かが私の家に集まって、いつの間にか分教場になってしまったのです。そこで教えるなかで、子供たちに宮沢賢治の童話を読ませたり、聞かせたりする機会があったわけです。ですから、子供たちとの対話を通じて、私は宮沢賢治をより深く知るようになったんです。

ニコル 子供たちとの対話を通じてですか。いいですね。ところでその分教場についてもっと話してくれませんか。

狩野 子供たちは小学一年から中学生までとそれに幼稚部として未就学児童までがやって



きていました。貧しい開拓村ですから、山が教室で山が講堂、山が運動場でした。ストーブもないから小屋の真真中に炉を切って、炉の周りにまるく机を並べて勉強するわけです。学習法は兄妹学習といって上級生が下級生を教える方式をとりまして、私は私で火吹き竹を片手に「フーフー」と炉の薪を燃やすのに苦勞していました。(笑)

ニコル (笑) さぞユニークな教室風景だったでしょうね。

狩野 そう。子供たちは貧しくていつも腹を空かせていたけれど、分教場といわれるのを嫌いましてね、いろいろ話し合って「桃太郎学校」と名づけたんです。この細々とした学校で、とにかく子供たちが卑屈にならないように、自信をもたせるために、と武道を教えはじめたのです。空手です。空手なら他の武道と違って道具もいりませんし、文字通り“からで”でできるものですから。(笑)

ニコル よくわかります。(笑) それが現在も続いているわけですね。

狩野 そうです。現在は「古武道桃太郎学校」といって、毎日曜日終日、礼法、ヨガ、空手、杖道、太極拳を教えています。もちろん今は昔のような学校じゃないですが、当時から、ずっと守っていることがあるんです。1.一生懸命になること。2.礼儀を正しくすること。3.弱音をはかないこと。4.元気をだすこと。5.反省の勇氣をもつこと。の5つです。今ではそれなりの問題をかかえた子が入門してきますが、この5つを約束させて真剣に取り組ませると見事に育っていきますよ。

ニコル すばらしい約束ですね。

狩野 また賢治の話になりますが、有名な『アメニモマケズ、カゼニモマケズ』の詩に、「デクノボウトイワレタイ」、私はこんな人になりたいとありますね。私はこの「デクノボウ」という言葉に非常に感動しましてね。別の言葉でいえば「阿呆」ですね。

私の雅号は「阿呆」にちなんで「呆庵」というんですが、賢治の「デクノボウ」をひとつの目標にしたわけなんです。あの詩にこめられた考え方は世界に通用すると思うんですよ。

〔延命堂〕

毎日朝3時といえば、
ぱっと目があいて、延命堂にこもるんです——

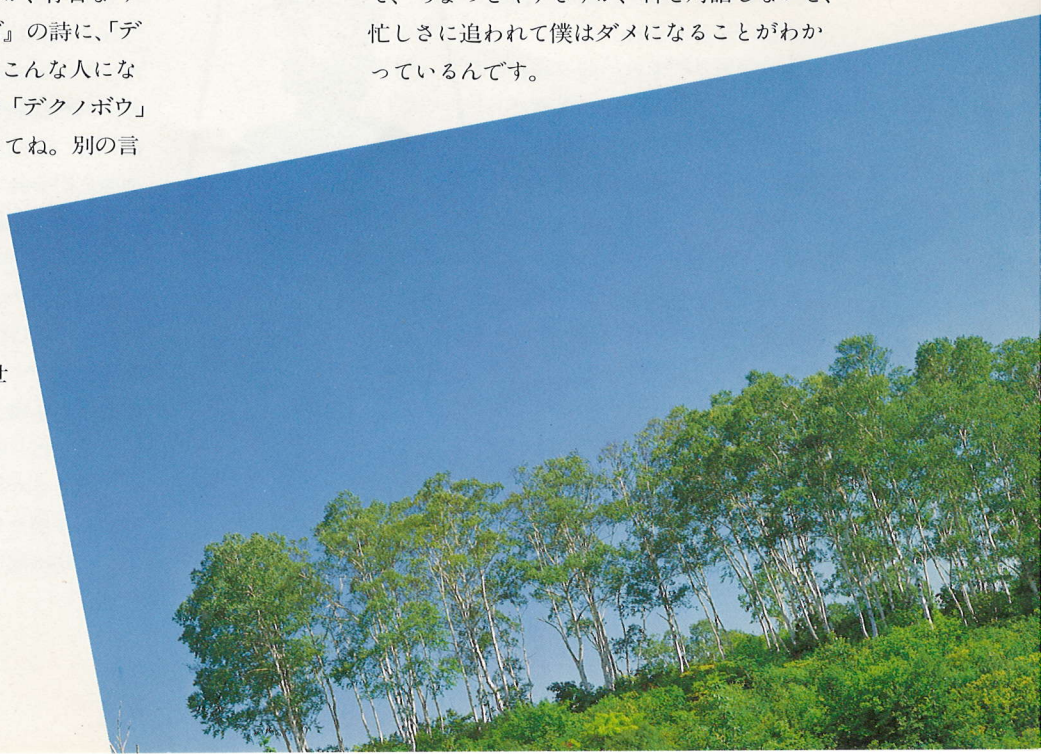
狩野 今は文明社会といわれるんですが、あまりにも賢すぎる片寄った社会だと思うんです。むしろ「文明」ではなくて、「便利」社会だと思いますね……。宮沢賢治は法華経に帰依しておったわけですが、ニコルさんの宗教観はどのようなものなのでしょう。

ニコル 僕は生まれた時からずっと、厳しいクリスチヤンの家庭に育ちました。それから世界中いろんな所

に行ったわけですが、17歳の時からしばらくエスキモーと一緒に生活したことがあるんです。その時、自然を神とする考え方、小石の中にもどこにでも神さまがいるという考えに真実を感じるようになりました。今もそうです。

狩野 なるほど。それに似た考え方で私の好きなのは、宮本武蔵の『五輪書』の中に出てきます。「道ばたの一本の草、一枚の葉にも道がある」と。宮本武蔵は、道ばたの一本の草、一枚の葉、これが私の先生だといって剣の道を歩んだのです。

ニコル 僕は今、仕事が忙しいことはいいことなんです、時々たまらなくなるんですね。この辺はいいところですが、外を歩くだけではもの足りない。もっと黒姫の奥深くこもって、ちょっとキザですが、神と対話しないと、忙しさに追われて僕はダメになることがわかってるんです。



ですから、山の秘密の場所にインディアン風のテントを張って、時間を見つけてはこもうと思うのです。鉄砲をかついで、犬と一緒にソリを引っぱって、食糧を持って。

狩野 それはニコルさん大切なことです。実は私の会社の真正面に「延命堂」という堂があるんです。私はこの30年間ずっと、毎朝3時に起床し、潔斎して延命堂にこもって祈願文を朗唱するんです。雪が降ってもなんでも、午前3時です。ニコルさんが山にこもろうとするのと同じで、私は延命堂にこもるんです。

ニコル 午前3時、毎日ですか……。すごいなあ。

狩野 それで、延命堂の中には、電球も何もなく、ただ壁に丸い窓があって、窓の向こうに木がある。その木に対して拝むのです。それと、いただいたお手紙や年賀状、名刺や電話の受付簿など、お客様に関係するあらゆるものがお祀りしてあります。約30万人分のお客様のお名前がそっくりあります。

ニコル 午前3時というのは、どうしてですか。

狩野 よく聞かれるんですが、いちばん暗くて、いちばん暁に近い。冬ですと、いちばん寒くて、いちばん日の出に近い。無明から光明にうつる時刻なんです。

ニコル そのあとずっと起きていますか。

狩野 ええ、休みません。

ニコル はあ……信じられない。

狩野 私は24時間眠っているという事なんです。起きていようと思うから眠いんであって、すでに眠っていると思えば目がぱっちりとかく。(笑) それはとにかく、ニコルさんのお話にあったように、山と語り、自然の声を聞くということが、今何よりも必要ですね。

『えんめい茶』誕生へ

私の薬草の先生はヤギなんです

ニコル 狩野さん、『えんめい茶』が生まれるまでのいきさつをお聞きしたいですね。

狩野 ええ。それについては忘れられない思い出があるんです…。まず、それから……。

ニコル どんな…?

狩野 買い出しの苦い記憶なんです。私の会社の入口に荷車の車輪がかかざってあるんですが、この車輪には私の二つの思いがこめられているんです。ひとつは入植当時の初心を忘れないため。もうひとつは『えんめい茶』誕生のきっかけになったともいえる、生涯忘れられない思い出なんです。

ニコル 心の記念碑ですね。

狩野 ええ。黒姫に来て間もない頃のことですが、お腹をすかした子供たちと、ある日「かぼちゃを買いに行こう」と大八車を引っぱって出かけたのです。すると、土蔵のある家の庭に、かぼちゃが山のように干してあった。それを買おうとして「おじさん、このかぼちゃを分けてもらえませんか。山の子供たちに食べさせたいんですか?」といったら、こうなんです。「このかぼちゃは、てめえらよ者に食わせるんじゃないやねえ。豚にやるんだ。」そして横を見たら、大きな犬が山盛りの白米にみそ汁をかけたものをおいしそうに食べているのです。子供たちは、それをボーッと見ておりました。私は自分が言った言葉を今でも覚えております。「僕たちは豚じゃない。帰ろうか。」みんなもうシューンとしま

してね。私も宮沢賢治のような生き方をしたいと思って来たのですけれどあんなに悲しい思いをしたことはありませんでした。

ニコル 怒りはありませんでしたか?

狩野 怒りというか、戦争に負けたということは、こんなにも無惨なものかとしみじみ思いましたね。それで、金輪際買い出しになんか行かないと思って、薬草の研究をおっぴじめたわけなんです。このことが動機で、前々から心にあった、食べられる草や、薬草を研究しはじめた。とは言っても何も知らないもんですから、ある時なんかトリカブトの芽を摘んで来て食べて、三日間人事不省になっちゃって……。

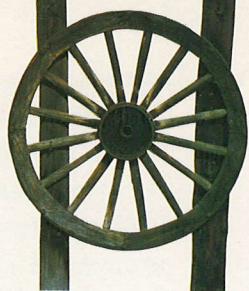
ニコル よく無事だったですね。それで強くなったんじゃないですか。(笑)

狩野 子供たちが朝迎えに来たんですが、私は布団をかぶったままで、足に触ると冷たい。「天狗先生死んじゃったよー」と言って、子供たちが私の手を引っぱって、顔をたたいて。私は子供たちの寝ずの看護で救われました。

ニコル 狩野さんは子供に縁がありますね。

狩野 その頃は薬草の本なんかないですから





ね。それで、今度はヤギを連れて行くようになりました。ヤギは絶対に毒草は食べないんです。何でも食べちゃうウサギと逆ですね。ですから、私の薬草の先生はヤギなんです。(笑)

ニコル なるほど。そのへんから『えんめい茶』も生まれてくるわけですね。

狩野 そうなんです。そうやって子供たちにお茶を作ってやるのがあって、「先生このお茶うめえなあ」というんです。だから『うめえ茶』という名前にしようじゃないかということで、最初はそう呼んでいました。ところが山の道端に「延命地藏」という石地藏があるんです。それで子供たちに話したんです。

「君たちはこんなに寒い雪の深い開拓地に入って勉強したり、お手伝いするので、きっとお地藏さまがこのお茶を授けてくれたのかもしれない。だから延命地藏の名をもらって、『えんめい茶』という名前にしよう。」そんなわけで、これまた子供たちとの対話を通して『えんめい茶』が誕生したのです。

〔武道家が始めた企業〕

『えんめい茶』というのは
単なる商品ではない
と思っているのです

ニコル そうやって考えると、『えんめい茶』にはいろんな重みを感じられますね。

狩野 そうなんです。山の子らには武道も教えました。私が学生時代からやっておった、空手と杖術と剣道です。ですから、こういう風に言えるのです。私は武道をそのまま活かして、黒姫にまず学校と道場をつくった。そして薬草の農場をつくり、さらに農民の工場をつくった。だから、私は『えんめい茶』というのは単なる商品ではないと思っているのです。大自然健康づくり運動のために黒姫さまが、養老の滝の伝説のように、酒でなく草々の恵みを茶として作らせたのだと信じています。

ニコル ところで、『えんめい茶』が売れ出した頃、工場が火事に遭われたんですって。ど

ういう原因ですか？

狩野 忘れもしません、昭和46年3月12日でした。私が出張中のことでした。焙煎機の煙突の過熱が原因でした。長野からタクシーをとばして黒姫に着くと、吹雪の中で工場が炎上しているんです。社員が手で雪をまらめて雪合戦のように火炎に向かって必死に投げつけているんですよ。雪で消火栓が凍って使えなかったんですね。結局、工場は全焼してしまいました。

ニコル それでよく立ちなおって、ここまでこられましたね。

狩野 ええ、みなさんのおかげです。もともと裸一貫でしたから、別に苦にもなりません。あらためて裸一貫という強さと有難さを感じ、一から出直すことにしました。

ニコル なにしる狩野さんは高下駄で黒姫に入って来た人だから。

狩野 (笑)クマ男の武者修行といったところでしょう。火災に遭ったことも、日本刀をつくるのに鉄を火で焼き、水にさらして鍛えるように、私も自然という鍛冶屋に火に焼かれ雪にさらされて打ち鍛えられた教訓だと思っています。

ニコル 僕自身「カラテ」を少しやりますし、狩野さんの言ってることは何となくわかる気がします。

狩野 武道の修練で体得したことは、真剣に立ち向かえば、どんな逆境に立っても活路が自ら拓かれるということでした。荒野を開拓するのも、『えんめい茶』を作るのも古武道の修練も、みんな魂の開拓だと思っています。

ニコル 山のきびしい自然が教えてくれたんですね。

狩野 ところでニコルさん。『えんめい茶』は、お飲みになっていかがですか。

ニコル ずっと飲んでますよ。『えんめい茶』はどこにあるか探さなくても、すぐ出せるところに置いてあります。僕は日本に来てから、ほうじ茶や麦茶が好きになりましたが、黒姫に来てからは『えんめい茶』党ですよ。取材で外国に旅行する時もティーバッグのを持っています。健康に良いのはもちろんでしょうが、僕自身は味、うまさにひかれるんです。それこそ「うめえ」茶と、言うんですか？

狩野 (笑)はあ、いやいや。ありがとうございます。それじゃ今日はどうもありがとうございます。おたがいにがんばりましょう。

ニコル Good luck!





株式会社 黒姫和漢薬研究所